

また、親鸞さまのおられた横川谷にははやくから阿弥陀如来の念佛宗があり、「常行三昧堂」に籠もって不眠不臥不休で九十日間、念佛行堂をするなかで、目の当たりに阿弥陀如來を観見しようという激しい修行も行われていました。親鸞さまの奥様（恵信尼さま）のお手紙には、親鸞さまは「山で堂僧」をなさつていたと伝えられています。

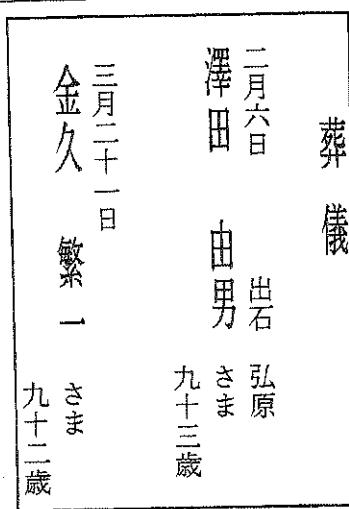
親鸞の生涯

比叡での修学

新鸞様（當時は範円といつた）が登った比叡山は、当時、東塔・西塔・横川の三区分に三千坊といつて峰々谷々いたるところに寺やお堂があり、そこではいろいろな学問や修行がなされておりました。今で言う「国立総合大学」と言うところでしょう。学部として円（全ての教えを含む最上位の法華一乗の教理・密（すべてのものの密奥にある大日如来の教え）・禪（精神統一瞑想によって真理を観する教え）・戒（戒律とくに自利利他をめざす大乗の修道者のまもるべき生活規律）の四つが基礎必修学科と定められていました。

寺寺を尋ねてこの基礎学問を研鑽なさいまし

た。それだけではなくしはしは山を降りて奈良の仏教寺院を訪ね、俱舍（物質分類学）・唯識（心理学）・華嚴（仏教世界觀）などの基礎仏教教理、その他中国思想、漢文学、解釈学等、叡山では学び得ない学問知識を貪るよう研鑽されました。聖人に関する当時の記録はないものの、聖人の後半生に著された著書、たとえば『教行信証』には、このころ学ばれた知識教養があふれるばかりに現れています。



までに激しい修行を積むにつれて、親鸞さまにはかえつて深刻な疑問が沸いて参りました

——は、當時既に比叡には僧兵という一團があり、武力暴力で宗教問題を処理しようとする風潮が起つっていました。また、比叡の中にさえ、一般社会の家柄や身分階級制が支配するという現実もありました。こうした親鸞さまとは全く異質の社会でなんで仏道が見えてくるでしょうか。

実から見ると、空理空論。実際の社会の苦悩民衆の苦難に対し何の力もない、一部貴族僧侶の遊びに過ぎない。当時全国的な天災地変による飢饉・餓死・盜賊・鬭争が横行していたそれを全く無視したつめたい教学。

第3、いまここにこんな姿で生きているこ

比叡にはいつてから10年立ったころ、親鸞様の血みどろの新たな求道が始まります。若い親鸞さまが、その苦悩の中から、取りすがり教えを捜し求めたのは、聖徳太子と上人でありました。

会長	大月	千鶴子	(栗尾)
副会長	中嶋	明美	(上村)
副会長	田中	紀美子	(栗尾)
副会長	衣川	はるの	(野尻)
会計	斎藤	幸恵	(上小田)
事務局	宮嶋	久美子	(小谷)
事務局	藤川	貴恵	(魚屋)
事務局	斎藤	昌子	(上小田)

十五日	觀桜会準備委員会
十六日	出石組御消息披露
二十二日	出石組總代会
二十三日	觀桜会（別配布案内）
二十六日	石田昌志氏宅法事
二十七日	真覚寺忌明法要
二十九日	夜久野光明寺永代経
	稻葉保夫氏宅法事
	本覺寺法事
	みのりを聞く会
	朗読ボランティアあすなろ編集日 みどりの日

中嶋	武志	(坪口)
湯口	妙子	(榎見)
南	加寿子	(片間)
永井	孝一郎	(矢根)
岩上	加代子	(上小田)

「出会い」「あらためて不思議な縁」と思い、
の一期一會の出逢いをもつたいく噬み締
める一ときをもつのです。

仏婦

四月
卯月
のこよみ

歳のせいでしょうか朝早く目が覚めてしま
います。そのままお布団のなかにいると、い
ろんなことが思い浮かんできて苦しくなる
ので思い切って起き上ります。そんなとき
絵筆をとって、思い浮かぶ気持ちを、絵手紙
ふうに描いて見るのです。
夫と、認知症の義母と、または村なかのあ
の方この方。そんな人々とのさまざまな形の

坪口の坂本 智佐登さま。葉(葉)風に仕立てて沢山わざわざ持つて来て下さいましたさつそく、先ずお聖教の葉に使わせていただきました。その他いろいろな本のしおりになりました。なにしろこのごろ、どこまで読んだのかさえ不確かになってしまいましたから重宝します。ほんとうにありがとうございました。

吉のほとけさま

昨年の暮れに入院したことです。

病室が同じで、向かいのベットに若いお母さんが入院しておられました。四、五歳くらいの男の子が、お父さんに連れられて見舞いにくるのです。するとそのお母さんは、ベッドの上にその子を座らせ、弱々しい手で抱き抱えてお話しの本を読み聞かせるのです。男の子は安心しきった様子で、嬉しそうにお母さんの声に耳を傾けていました。

私は一週間ほどで退院しましたから、その後のことはよく分かりませんが、でも、元気な間にわが子に本を読み聞かせ、何かを伝えようとしておられたのではないでしょか。

これはある老先生から聞いたこと

わたししが昔の旧制中学に入学したころ、「つづれ草」という古典を初めて習いました。ところが誰に教えられたのでもないのにその冒頭の文章が私の口からスラスラと出てくるではありませんか。先生も驚かれましたが一番びっくりしたのは私でした。なんであの文章を暗記していたのだろう。だれに教えられたのだろう。長い間の疑問でした。

それから二十年余りも後、古い倉庫のなかを整理しているとき、私が十歳のときに亡くなつた母が嫁入りのときにもつて来たものの中に日本古典全集の分冊の幾つかが出て来ました。母は幼いわたしたを寝かしつけながらこの古典を音読していましたに違ひありません。

パソコンやインターネットでの会話は文字の上で情報交換です。

ひとの心はやはり肉声の響きから伝わってくるのでしょう。

親の願いは、声となって何十年のちまでも私に響き続けてくれるのであります。

小学一年生の「母」という詩です。

「行つてきます」
「氣をつけてね」

と母がいつた
お母さんの声が
学校までついてきた

そこから今度は養護托老施設のデータサービスセンターミニ移り増した。ここは土・日だけは休み。祝祭日も年中ベッタリの老人介助。ここで3~4年、張り切つて活動させていた。だきました。車椅子での送迎・入浴介助・食事補助何から何までさせてもらつていまし

た。スセンターミニ移り増した。ここは土・日だけはほとんど被害にあいませんでした。しかし、地震のあと停電になり、ラジオを聴いているところが、少しずつ被害の状況がわかつてきました。「えらいこっちゃ」。新長田駅への地下鉄は動きません。自転車で一時間あまり、山越えをして惨状をまのあたりにします。火を逃れ、倒壊した建物を避け、勤務先の神戸協同病院に駆けつけてみると、けがをした人たちで大混乱の状況でした。薬もカルテも散乱しています。病院の庶務担当者として、まず電気とも響きわらうへわれ仏道を成るに至りて、名声十方に超えん。究竟して聞こゆるところなくば、誓つて正覚を成らじ。そのように誓つてほとけさまにお成りにお成りになりました。

わたしは忘れていても、親の願いは「なもあみだぶつ」という声になつてわたしについて来て下さつていています。

(ないおん話を読んで)



わたしの辿つた道

週一度の托老所遊友クラブ」のボランティアに行きはじめたころは、今から思うと意気軒昂、社会正義に燃え、「義を見てせざるは勇なきなり」。身体の不自由なお年寄りのお世話をさせていただくのはわたしの務め。福祉社会を支えるチャンピオンといった意識であつたように思います。

そこで4~5年活動しているうちにふと気づいたことは周囲はみんな女性ばかり、男性のボランティアは私一人。なんで男はボランティアに参加しないんだろう。ひょつとして

ところがそのうち介護保健法の条件が厳しくなり、単なるボランティアでは活動範囲が大きく制限されていました。邪魔者扱いされてしまうよりも感じたものでした。そのなかで「いやそうではない。とくにボランティアするにはいつもその分を心得ていなくてはならないのだ。行き過ぎやり過ぎは、かえつて相手を傷つける」ということを教えられたようになります。君子、危うきに近かずかず。

「してあげる」という善意の過剰から、「してあげているのに」という「いじめ」がはじまります。

そこでの活動は、それからは早朝お年寄りを迎える準備作業に止め、その後午前9時からは同じ福祉ゾーンにある「知的障害者自立支援小規模作業所はこべの家」に行き指導員の人や知的障害の人達と作業したり遊んだりそれから学んだり。たいがい午後3時まで過ごします。

ボランティアなんていうより、今の私には生きる楽しみなのであります。

孔子様は「こころ欲するところに従つて矩(のり)を踰(こ)えず」。これが人生の究極と言わされました。

ボランティアなんていうより、今の私には生きる楽しみなのであります。

ほとけさまのお悟りは「遊戯地三昧」(ゆげじさんまい)。

「度無所度」といつて、人のため・人を救うなどという思いからはなれて、ただただ自然遊び戯れるごとくふるまうなかでのボランティア。そのように教えられていることを、このごろ慕わしく思っております。

「駒どりの家」

(一)

NHKラジオ深夜便掲載

西橋正泰アンカー

十一年前の阪神淡路大震災のとき、神戸市

須磨区に住む八木徹さん(六十五歳)の自宅はほとんど被害にあいませんでした。しかし、地震のあと停電になり、ラジオを聴いているところが、少しずつ被害の状況がわかつてきました。「えらいこっちゃ」。新長田駅への地下鉄は動きません。自転車で一時間あまり、山越えをして惨状をまのあたりにします。火を逃れ、倒壊した建物を避け、勤務先の神戸協同病院に駆けつけてみると、けがをした人たちで大混乱の状況でした。薬もカルテも散乱しています。病院の庶務担当者として、まず電気と水をなんとかしなくてはなりません。そのうち多くの遺体も運び込まれてきました。翌日には系列の病院の医師や看護師たちが、全国から救援にかけつけてくれました。チームを作り、地域へ案内して診療に当たつてもらう。すぐ病院に戻り、別のチームを案内する。三日間病院に泊まり込んで家に帰つて見る。と、家が全壊した親戚の人たちが、大勢八木さんのお家を頼つて来ていました。翌日にはまた病院へ。

実は震災の前から八木さんの父親は肺炎で、八木さんが勤務する病院に入院していました。大混乱の中で充分な治療を受けることができず、震災から十日後に息をひきとりました。「地震では助かった命やのに。自分がそばにいた。八木さんの兄はボソッと「俺も死にたいわ」とつぶやいたといいます。まさか、あとを追うように兄が自殺するなど、想像もししませんでした。兄は神戸港の荷役運送会社に勤めていたのですが、突堤がつぶれて仕事がなくなり、名古屋に転勤を命じられ、赴任して十日あまり後のことでした。八木さんは震災からひと月もたたない内に、父と兄を失つたのです。震災関連死にも含まれない多くの犠牲者の存在に胸が痛みます。

八木さんは、六十歳で病院を退職したあと、托老所「駒どりの家」(神戸市長田区)でボランティアを始めました。利用者のお年寄りの送迎や「駒どりの家」のニュースを作っています。いつも笑顔をたやさず、お年寄りや周囲の人たちを和ませ、包みこむような人柄です。命のはかなさを知るからこそ、命ある今をいとおしく思うかのようです。